観光地登別の整備が進む

昭和9年には、登別温泉ふれあいセンターの裏側に『子供の国遊園地』がオープン。園内にはシカやサル、クマ、トナカイ、クジャクなどの小動物園や遊具などが設置され、娯楽施設として人気を呼びました。

また、昭和10年には、オロフレ峠を経て壮瞥町蟠渓に通じる道路が完成。そして、登別駅も外壁に地元産の間知石を使用し、さらに貴賓室を設けるなど、登別温泉の玄関口としてふさわしい駅舎として整備されました。

これらの事業が観光客の増加につながり、昭和12年には日帰り客に対応した近代的な大浴場がオープン。この大浴場には、大小20の浴槽や25メートルの温水プールが設けられました。

また、昭和13年には第一滝本館が既存の大浴場を拡張し、さらに新しい浴場を建設。直径35メートルの円型大浴場は『東洋一』の大浴場として全国で評判になりました。

戦後の登別温泉

第二次世界大戦が終結して登別温泉に住む多くの村民は、試練と耐乏の生活の中、登別温泉の復興を目指して取り組んでいましたが、交通の問題がありました。

このころの登別温泉までの交通機関は、電車からバスに切り替わっていましたが、戦争が激しくなって老朽化したバスの入れ替えができなくなり、湯治客の輸送にも事欠くようになりました。そのため、昭和21年からトラックで送迎を始めましたが、湯治客から苦情が寄せられたため、バス会社に掛け合い、トラックに幌をかけ、板の腰掛けを付けて運行するようになりました。

登別温泉は、戦後の混乱期にもかかわらず繁盛。昭和21年10月、全国でも珍しい『湯祭』が第一滝本館で開催されることになりました。これは現在毎年2月に開催している『湯まつり』の先駆けとなるものです。

温泉医療の取り組み

登別温泉は、温泉医療とも深いつながりがあります。登別温泉会社二代目社長の栗林徳一が、昭和10年の欧米視察で、温泉が諸外国で医療に役立っていることを知り、帰国後、文部省が北海道大学附属病院の分院を登別温泉に計画していることを知り、診療科目の中に温泉医療を取り入れるように働き掛けました。そして、分院設置が閣議決定されると、栗林徳一は建設用地の無償提供などを行い、翌11年に病院が設置されました。

また、昭和21年に財団法人年金保険厚生団・登別整形外科療養所（現・登別厚生年金病院）が開院しました。

終戦当時は、戦争による傷い者や

登別温泉の歴史

安政5年	（1858年）	幌別場所請負人の岡田半兵衛が、道路を開削し止宿所を建設、滝本金蔵が湯守となる
慶応3年	（1867年）	江戸幕府第15代征夷大将軍徳川慶喜が朝廷（天皇）に大政（統治権）の返上
明治2年	（1869年）	蝦夷地を北海道に改称
		片倉邦憲幌別郡の支配を受命、登別市の開基となる
		日の丸を国旗に制定
3年	（1870年）	幌別郡村名布告、登別・幌別・鷲別の3村となる
6年	（1873年）	滝本金蔵、紅葉谷の上を通る道路を開削。客馬車を運行
24年	（1891年）	鉄道室蘭線開通、幌別駅・登別駅が開業
25年	（1892年）	岩倉平治、登別温泉に湯宿（さぬき屋）を開く
28年	（1895年）	登別温泉に玉川商店が開業し、初めて雑貨を商う
29年	（1896年）	滝本金蔵、浴客用の外湯（滝の湯・塩の湯・万寿湯）を設ける
31年	（1898年）	
32年	（1899年）	カルルス温泉開業
大正4年	（1915年）	栗林五朔が登別駅～登別温泉間に軌道敷設、馬車鉄道が走る
14年	（1925年）	登別駅～登別温泉間に電車が運行
昭和4年	（1929年）	登別～登別温泉間にバスが運行
5年	（1930年）	登別～登別温泉間に貸切自動車が運行
7年	（1932年）	カルルス温泉スキー場がオープン
9年	（1934年）	登別～登別温泉間に桜を植樹
10年	（1935年）	登別温泉に子供の国遊園地がオープン
11年	（1936年）	胆振アルプス縦貫道（オロフレ道路）が開通
12年	（1937年）	登別温泉に北大医学部附属病院登別分院が開院
15年	（1940年）	登別温泉に大浴場がオープン
16年	（1941年）	太平洋戦争が始まる
18年	（1943年）	登別温泉に大湊海軍病院登別分院が開院
20年	（1945年）	第二次世界大戦終結
		傷い軍人登別温泉療養所と大湊海軍病院登別分院を統合し、国立登別病院として開院
21年	（1946年）	登別整形外科療養所が開院
24年	（1949年）	支笏洞爺国立公園に指定
26年	（1951年）	町制施行、幌別町となる